

他者との付き合いが上手な人と下手な人がいます。上手な人は他者との距離を適切に保ち、共有する場所と時間を互いに満足できるように配慮ができる人です。相手の思いや感情を察して、笑みをたやさず、慎重な言葉遣いをして相手のために心を砕いているからです。ところが、過剰に他者に適用しようとする自分自身を失ってしまいます。人間関係においては相反するこの距離感と適応力の調整が難しく、そのためには自分自身をしっかり受容してしないと、他者を理解したり、他者を受容することはできません。

その際に、まず自分自身をよく知ることが『相手を知る力と見抜く力を身に着ける』ことにつながってくるのです。というのは、自己という問題は一生涯つきまどっている課題だからです。歳を重ね人生経験を積んで人の相談に乗るようになっても、自分という厄介な存在を理解する務めから誰も解放されることはありません。

人間は自己が成熟して確立してから他者が理解できるようになるのではなく、他者という存在にぶつかって、それに撥ね返されるようにして自己という存在が生まれるのです。幼児期は自己と他者の境界線があいまいですが、親や兄弟が自分とは別の精神世界にいることが分かるようになって、初めて親や兄弟が他者なる存在になって、それと同時に自分の意識が生まれるのです。このようにして、ほかの誰でもない自己が生まれることによって、その自分自身を理解していく歩みと、他者理解を同時並行で行っていく壮大な旅へと船出していくことになるのです。

そのためには自分自身とある程度の距離感を保ちながら上手に付き合い、さらには自分を上手にコントロールしていくために、自分の思考パターンの特徴や傾向を認識して<sup>1</sup>おく必要があります。

「こういうケースの場合にはいつもイライラする傾向が自分にはあるな」とか「怒るときは、自分の中の未解決の問題があるときだな」とか、「周囲との軋轢を我慢して無理にニコニコしていると、感情が爆発するときがあるな」などと、自分がどのようなときに、どのような反応をするのかというパターンに気づくことが自分自身の課題に気づくきっかけになります。

一般に他者を理解しうまく付き合うためには相手への配慮が大切だと考えがちですが、実はその時、同時に自分自身への配慮を行っていないと、他者に対する配慮ができなくなってしまうのです。ですから、自分の等身大の実像に向き合うことができない人は、自分自身が自分を背負うことができないので、そのつど自分以外の他者に責任転嫁をして、自分自身の実像を見ようとはしません。結局、自分への理解が浅い人は、他者理解も浅くなり、他者に対して共感することも難しくなってしまうのです。

この意味で私たちは自分自身ととことん付き合う覚悟が必要です。ところが、自分という自分にとって一番身近な存在が、実は最も理解しづらく厄介な存在であり、謎めいたものであることを認識しておきたいものです。自分が自分のことを一番知っていると自分でいる人は他者の内面世界に分け入って、そこでの葛藤や問題に寄り添うことはなかなかできません。

「オンブオバケ」という昔話があります。

暗い山道と与作が歩いていて、ひょいとオンブオバケが与作の背中に取りついた。与

作は最初は気づかなかったのですが、でもだんだん体が重たくなってきて、山道を歩くとぜえぜえと息切れがしてしまうのです。お月さんが出てきて、ふと与作が自分の影をみると、なんと影が二重になっているではありませんか。自分の背中に何かが取り憑いているようなので、懸命に何が背中におぶさっているのか自分の背中を見ようと思っても、ちらっと影が見えるだけで、背中に何が憑いているのかよくわかりません。そこで、与作は振り払おうと急に駆け出したり、ジャンプしたり、転がったりするのですが、そうすればするほど、その何者かは自分の背中に重くのしかかってくるのです。与作の嫁が、与作の帰りがあまりに遅いので、提灯をもって迎えに行ってみると、背中にオンブオバケが取り憑いているのが見えたので、「与作どん、オンブオバケがついとりますらあー。与作どんのオンブオバケさんよ、早よう消えてくろ」と懸命に頼んだけれども、そのオンブオバケは与作の背中から消えることはなかった……。おおよそ、こういう内容です。

このオンブオバケは自分という課題を抱えている人間の姿を現しています。オンブオバケは自分という存在のメタファーだと考えてみると、人間は与作のように厄介なオンブオバケである自分という存在を抱えながら生きていくことになります。それは他者にはしばしば見えるものですが、自分では見ることができません。しかも、自分自身にとってそれは重荷としていつも感じられるものなのです。

ヨハネ福音書6章22節を見ると、『その翌日湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこに小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた』とあります。「その翌日」とは、イエスが5000人の人々の空腹を満たした奇跡を行った翌日のことです。群衆はイエスの動きを観察していました。不思議なのは、弟子たちだけが舟に乗り込んで向こう岸に向かったはずなのに、そこにイエスの姿はなかったことです。するとそこに、ティベリアスから数その小舟がやって来たので、群衆はこれ幸いとばかりに、その小舟に乗り込みました。そしてイエスを探しにカファルナウムに向かいました。カファルナウムでイエスを見つけると、彼らはイエスに言います。『ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか』。すると、イエスは答えられます。『はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ』と言います。群衆がガリラヤ湖を渡って、わざわざイエスを探しに来たのは、奇跡を見て神の支配が現実の世界に確立していることを信じたからではなく、パンを食べて満腹したからだということです。現実にはいろいろな課題を群衆の一人ひとりも抱えていたでしょう。けれども、彼らは、そういう重荷からの救いを求めてイエスの許に行っただけではなく、ただパンを食べて満足したからだったのです。つまり、彼らは救いを求めてイエスを捜していたのではなく、自分の欲求が満たされるためにイエスを捜していたのです。この姿は、自分の意志通りに生きていくようであっても、自分の欲求に従っただけであって、本当に自分を生かす存在を求めてはいない私たち自身の現実の姿を現しているのではないのでしょうか。

私たちは誰もがオンブオバケという自分の重荷を背負って生きています。そのような私たちが救われるためには、『永遠の命に至る食べ物のために働く』(27節)ことが求められるのです。永遠の命に至る食べ物とは、イエスが唯一の救い主であるという信仰に生きることです。イエスという存在だけが、私たちの背中におぶさっているオンブオバケを取り除いてくださり、真実に生きる道を指し示してくださるからです。